

今号は盛り沢山の記事で24 pages立てである。巻頭は、1994/1995 Mars Note (13) 「1995年一月のアルバの白雲活動(051°Ls)」 "On the White-Cloud Activity of Alba Observed at the End of January 1995 at 051°Ls" が、取り上げられている。一月末に見られたバーストから三月までの各地での観測がまとめられている。表紙のスケッチは岩崎徹(Iw)氏のものである(27Jan1995)。

OAA Mars Section Reportも始まり、1回目は15 Sept 1996 (009°Ls, $\delta=4.6''$)迄の観測が報告された。観測者は、日岐敏明(Hk)氏、南政次(Mn)氏、中島孝(Nj)氏、Richard SCHMUDE Jr (RSc)氏の四名である。

LtEは、外国からは、Richard SCHMUDE Jr (USA)、Paolo TANGA (Italy), Daniel TROIANI (USA)、Richard McKIM (UK)、Jim BELL (USA)、Frank MELILLO (USA)、Detlev NIECHOY (Germany)、Giovanni QUARRA SACCO (Italy), Rik HILL (USA)の各氏より、国内からは、Hk氏、Iw氏の便りが見られる。

ジム・ベル氏からのe-mailには、HSTの1996年10月の火星撮影スケジュールを含む Marswatch Electronic Newsletterが添付されていて、全文が掲載された。HSTの観測に併せて国内でも同時観測を勧める連絡が流された。

Noticeとして、「火星共同観測についての研究会のお知らせ(2)」(世話人: 時政 典孝(西はりま天文台)・赤羽 徳英(飛騨天文台))が掲載されている。

「ジョヴァンニ・A・クアッラ・サッコ先生 紹介」は、八月に福井を訪ねて親交を持った QUARRA氏の紹介記事である。ひととなりの他に、今回の福井訪問のこと、天文観測の活動のことなどが紹介されている。紙面がつきて英文だけの掲載になった。和文はCMOホームページに掲載されている。 <http://homepage2.nifty.com/~cmo/GQrIntroj.htm>

他に十月の天象とTen Years Ago (9)があり、TYA(9)はCMO#016 (10 Sept 1986), CMO#017 (25 Sept 1986)の二号分の紹介である。廿年前当時の火星は、接近後の遠ざかって行くところであり、九月半ばには視直径が15秒角を下回ってしまっていた。CMO#016には、Iw氏の「惑星の眼視観測用機としてのフローライト屈折の問題点」が掲載されていた。 **村上 昌己 (Mk)**

